

サミュエル・ヘーズレット主教の日本での活動の背景と収監の要因

—— A・ハミッシユ・アイオン氏および塚田理氏の所論を中心に ——

松平信久

一．はじめに

筆者は、本紀要の第八号（二〇一二年三月）に、サミュエル・ヘーズレット (Samuel Heaslett) 主教の獄中記『日本の監獄から』を、北條鎮雄氏との連名で翻訳、掲載した。この体験記は、太平洋戦争勃発の当日に、晴天の霹靂のように、本人にもその理由が不明のままに逮捕・収監されたヘーズレット師の驚きから始まっている。満四か月におよぶ監房での生活の不安、取調官の高圧的な態度による理不尽な尋問、体調の悪化を伴った絶望感など、高齢（収監時六六歳）の主教が体験した獄中生活の様子は、この獄中記に余すところなく記されている。

このような逮捕・収監という事態は、ヘーズレット主教が遭遇した試練の最たるものであったが、しかし、同師の主教としての在任期間（一九二二年～四〇年）は、全体を通して様々な難題と試練の連続であった。特にその後半は、日本聖公会にとって、また、イギリス、アメリカ、カナダ各聖公会から日本へ派遣されてきた宣教師たちにとって、布教開始以来最も厳しい時代であった。日に日に偏狭な超国家主義の色彩を強め、国際的な孤立の道を歩む日本の政治・社会状況が、キリスト教を圧迫し追いつめ、その存立を危うくしていたからである。尤も、「日本」という国家がキリスト教に立ちはずだかつて、これを排除もしくはその体制に併呑させようとする動きは、この時代に激化したといえ、日本への宣教開始以

来、潜在、もしくは時代を追って顕在化し、種々の姿で存在し続けてきた。

カナダの歴史学者、A・ハミッシュ・アイオン (ION, Andrew Hamish) 氏は、日本におけるキリスト教宣教に関わる諸課題を、主として、イギリス聖公会やその宣教機関から派遣された宣教師側の資料や視点から点検し論及を行っている。この研究ノートでは、同氏の所論に依拠しながら聖公会の宣教史の課題を点検し、ヘーズレット主教の諸経験の特質と背景について、考察を加えることを目的としている。

アイオン氏は、カナダのオンタリオ州キングストン (Kingston, Ontario) にあるカナダ王立防衛大学校 (The Royal Military College) 歴史学部名誉教授であり、中国、日本、中東の各国史、ヨーロッパ・カナダ関係史などの研究者である。その研究の一環として日本をはじめとした東アジアにおける外国人宣教師の経歴や働きについて精力的に論文を発表している。この研究ノートで参照、引用する同氏の著書や論文は、『*The Cross and the Rising Sun*, Volume 2 *The British Protestant Missionary Movement in Japan, Korea and Taiwan, 1865-1945* (以下「表記」)、『*For the Triumph of the Cross: A Survey of the British Missionary Movement in Japan, 1869-1945* (アイオン②)』②の日

本語版・光永雅明訳「十字架の勝利のために 英国による対日布教活動の概観 (二八六九―一九四五年)」(アイオン③)、および、H・コータツツイ (Hugh Cortazzi) 編による『伝記的肖像シリーズ』の41に収められた SAMUEL HEASLETT, 1875-1947: *Missionary and Bishop* (アイオン④) である。アイオン①では、日本が併合・領有した韓国、台湾での布教を含めた日本の宣教活動の歩みが詳述され、②③④では、より焦点化した、英国による対日布教活動の状況が、やや批判的に概観されている。また、④では、ヘーズレット師が、南東京地方部主教、日本聖公会総会議長としての職務を遂行するにあたってその背景となった、母国イギリスの二つの宣教協会の動向や、アメリカンミッションとの対応、日本聖公会の邦人主教との関係などについて興味深い考察が行われている。

以上に加えて、本稿では、イギリスの宣教協会の特徴や、日本の国家主義体制とキリスト教との関係について、塚田理氏^{註⑥}の以下の論考に多くを負っている。

『日本聖公会の形成と課題』(以下「塚田①」と表記)、『天皇制下のキリスト教——日本聖公会の戦いと苦難』(塚田②)、『初期日本聖公会の形成と今井寿道』(塚田③)、『イングランドの宗教』(塚田④) (以上の、アイオン氏、塚田氏の著書や論考についての詳しい書誌は、文

末の「一四」引用・参考文献」に記載した）

なお、本ノートで引用・参照している、原文が英文の書簡、報告などは、ほとんど、塚田②、③や、「アイオン①〜④」からの再引用であることを予めお断りおきたい。また、「監督」「長老」など、日本聖公会でかつて用いられていた聖職名は、本稿では、引用部分などを除いては、「主教」「司祭」など現行の職名を用いている。

注① 日本におけるアングリカン神学の第一人者。立教大学、聖公会神学院を卒業後、オックスフォード大学で学ぶ。聖公会神学院教授、立教大学教授、同総長、立教学院院长などを歴任。

二、日本におけるヘーズレット師の経歴

ヘーズレット師の履歴については、先述の獄中記の翻訳の際に詳述したが^{注①}、ここでは師の来日以来の足跡について再確認しておく。

同師は、一九〇〇（明治三三）年に、CMS（後述）に所属する宣教師として来日した。日本在任の前半にあたる二二年間は、徳島県、千葉県（館山聖アンデレ教会、安房大貫キリスト教会）などでの宣教・牧会活動と、それに続く、聖公会神学院での聖職者養成の任務に携わった。聖公会神学院（一九一一・明治四四年設立）

への赴任の時期は、その学院の草創期で、師の同僚の教授陣は、初代・今井寿道校長の下、日本人、および、アメリカ、イギリスからの宣教師で構成されていた。その中には、日本人神学生に多大な影響を与えた日・日・ケリー（Herbert Hamilton Kelly）神父^{注②}も含まれてくる。その間、第一次世界大戦（一九一四年から一八年）の終末期に、中国人の労働隊^{注③}の将校としてフランスで三年間^{注④}勤務した。日本に戻って間もなく、一九二二（大正一一）年にC・ボウフラワー（Cecil Boufflower）^{注⑤}師の後を継いで南東京地方部（後の南東京教区を経て、現在の横浜教区）主教に就任し、一九四〇年一〇月までその任にあった。その時期の最初の数年間は、神戸、北海道両地方部の専任主教が空席であったために、その管理主教も務めた。さらに、一九三三年から三八年まで、日本聖公会を代表する立場である、日本聖公会総会議長や主教会議長（現在の首座主教にあたる）としての重責を担った。このように、師の在日期間の後半は、主教としての職責を果たすための約二〇年間であった。

一九四一年二月八日に逮捕・収監されて取り調べを受けた後、一九四二年の四月八日に釈放され、その年の七月に交換船で帰国した。終戦後、一九四六年に、日本の教会への激励、復興状況の視察と支援策の模索のために、イギリス聖公会派遣特使として再来日。一九四七年

(昭和二三)年一〇月一六日に、補佐主教を務めていた、イングリッド中部のシェフィールド (Sheffield) で逝去した。満七一歳。死因は、収監中にも発作を起こした心臓病であった。

アイオン氏は、主教在任中のヘーズレット師について次のように表現している。「一九二二年から一九四二年までの二〇年にわたる日本での宣教師・主教としてのサミュエル・ヘーズレットに、あれ以上の悪い時間を与えることは、神の摂理によるにしろ運命によるにしろ、不可能であったと言えるかもしれない。この二〇年の間、列王記¹注⁶に記載された、大風、地震、火事などの聖書的なイメージ、これは日本の状況に言い換えれば、台風や洪水にあたるが、それら呼び起こす大きな危機の連続によって、宣教師館の落ち着いた世界は引き裂かれていた」注⁷。また同時に、「ヘーズレットは、四二年間にわたり、実際の・比喩的両面のあらゆる危難を経て、誠心誠意をもって任務にあたった『確固たる強い意志を持った人物の一例』として描かれてきた。ヘーズレットの芯の強さは、英国人が、戦時中に、よく彼らの同胞を誉めるさいの、お決まりの特質かもしれない。しかし、二つの大戦に挟まれた時代の主教としての彼の経験と奮闘は、イギリスの宣教師活動の弱点を明らかにするだけでなく、日本での英国の影響力の、より一般的な衰退を

象徴していると捉えることができるかもしれない」注⁸と述べている。つまり、同主教が背負った困難は、日本の政治的、社会的状況、それに加えて日本聖公会内部での葛藤などが生み出すものによるばかりでなく、イギリスという国自体およびイギリスの宣教師協会の働きの弱さと弱体化、および、それに伴う日本の教会（日本聖公会）内での、同国または同国聖公会の存在（感）の後退にもよっているということである。

その指摘を受けて、われわれはまず、日本への宣教を担った、イギリス聖公会の二つの宣教協会の動向について概観し、それに続いて、その働きの「弱点」や「弱体化」について点検してみたい。

注① 「訳者による補遺」サミュエル・ヘーズレット著 北條静雄・

松平信久訳『日本の監獄から』立教学院史資料センター『立教学院史研究』第8号一二二―一六頁 二〇一一年

注② イギリスのノッティガム・シャーのケラム (Kelham) 修道院 (The Society of the Sacred Mission <SSM> の修道院)、および、ケラム神学校の創立者、校長。英国から優れた教授を招きたいとする今井校長の招聘を受けて、一九一三年に來日。一九一九年までの六年間、聖公会神学院教授を務めた。従ってその在任期間のほとんどは、ヘーズレット師と重なっている。その薫陶を受けた卒業生の多くは、後の日本聖公会の中心的指導者と

なった。後掲「一四」引用参考文献」17を参照

注③ 第一次世界大戦中、連合国側の労働力不足を補うために、中国やその他の国の労働者が、国家間の協定にもとづいて雇われた。彼らは、フランス、ベルギーなどで、建設、道路や鉄道の補修、砂糞詰めなどの非戦闘的作業に従事した。

注④ 聖公会神学院校友会機関誌『山陵』第一号（大正七（一九一八）年三月二七日発行）に同師自身が執筆した、「戦線に向はんとして」と題する記事から、同氏がフランスに向かったのは、一九一八年のことであったと推測できる。上記記事は『聖公会神学院一〇〇年記念誌』に収録されている。

注⑤ S P G 派遣の宣教師。日本での在任期間は、一九〇九年～一九二一年である。

注⑥ 旧約聖書に収められている、古代ユダヤの歴史書の一つ。上下1、2に分けられ、ソロモン王の治世からユダ王国の盛衰に至る過程が描かれている。

注⑦ アイオン④ p. 443

注⑧ アイオン同右

三．イギリス聖公会による日本宣教^{注①}

イギリス聖公会による海外伝道は、教会の組織に直属する機関によるものではなく、聖職・信徒の有志によって結成され運営される宣教協会の働きとして行われてき

たことに大きな特色がある。その点は、教会組織の一つとして位置づけられた「アメリカ聖公会宣教委員会」(The Board of Missions of the Protestant Episcopal Church, U.S.A.) が直接に掌握し運営するアメリカ聖公会の場合と大きく異なっている。英国の宣教協会のうち、日本で活動を展開した主なものは、S P G と C M S である。

S P G (The Society for Propagation of the Gospel = 英国聖公会福音伝播協会) は、キリスト教の禁教令が撤廃（一八七三・明治六年）されるとすぐに、A・C・シエウ (Alexander Croft Shaw) と W・B・ライト (William Ball Wright) の二人の宣教師を東京に派遣した。S P G は、当初、イギリス植民地でのイギリス人を対象とした宣教・牧会活動を行うことを目指し設立されたことから、既存の制度や組織に依拠した保守的・体制的な傾向を持っていた。従って、特定の主義主張を鮮明にするものではなかったが、後述の C M S が福音主義の立場を明確にしたのに比べ、カトリックの側面や教会の伝統を尊重する傾向（アングロ・カトリック、ハイチャーチなどと言われる）をもっていた。また、伝道方策については、統一的原則よりも、宣教師各個人の資質、能力、判断に委ねて来たと見えよう。S P G は、主として、東京の一部、横浜を初めとした神奈川県、千葉

県、東海、神戸地方などで活動を展開した。

一方、特に福音主義的信仰に立ちながら、海外伝道を目指す協会として設立されたのが、CMS (The Church Missionary Society = 英国教会伝道協会) である。この協会の構成員には、「異教徒に福音を知らせることに努めるのは、キリスト者各自の義務である」と考える同志的集団としての意識が強く、体制や慣習の維持・尊重よりも、自発的意志に基づく福音伝道活動 (SPGの傾向に対してロウチャーチと呼ばれる) を展開した。一九世紀中盤から後半にかけて、CMSの会長を務めたヘンリー・ヴェン (Henry Venn) は、同協会による宣教にあたっての原則を策定し、その実施に努めた。その宣教の原則は、「伝道地において、自立、自給、自主伝道を行う教会 (Native Church) を創設すること」^{註②}にある。従って、イギリス本国からの派遣宣教師は、順次、当地の聖職、信徒に教会の働きを譲り、最終的には当該地教会を離れ、「その先の地域」へと移動することになるのである。この原則は、ヘーズレット師の主教としての裁可や決断に際しても、その判断の基軸の一つとなっていたように思われる。CMSは、自派に属する宣教師養成のための神学校を設置して、そこで福音主義的神学の教育を行うと共に、宣教師として必要な知的・精神的訓練を施した上で現地に派遣した。ヘーズレット師も来日に

先立って、ロンドンのイズリントン (Islington) にあったCMSの宣教師養成機関で教育を受けている。日本での聖職者養成教育に関しても、CMSはこの方針を重視し、自派の神学校の独自性を守る立場から、一九一一年に日本聖公会の中央神学院である聖公会神学院が発足した際にも当初は合流をしなかった。

同協会による日本への宣教はSPGよりも早く、一八六九 (明治二) 年来日の宣教師G・エンソウ (George Enson) によって開始された。その後も、少なくとも一九〇〇年前後までのCMSによる宣教師派遣は積極的で、米国聖公会からの派遣宣教師と並ぶ多数を数えた。その伝道地も、北海道、九州、東京および大阪の一部、四国、中国地方など広範囲に及ぶ。

このように、SPGとCMSは、その宣教の理念や方法、そしてチャーチマンシップにおけるいわゆるハイチャーチとロウチャーチの違いなど、それぞれの特色があった。そしてこの二つの伝道協会は、互いにその特色や独自性を維持し強調したことから、対立や反目が生まれた。それは、日本聖公会が、一八八七 (明治二〇) 年に一つの教団として組織された後も解消されなかった。一例として、ヘーズレット師が教授として赴任した、発足間もない聖公会神学院では、日・米・英国 (SPG、CMS) 人教授が揃い、「今振り返ってみれば、極めて

意欲的なものであった。(中略)。しかし内情は各伝道団体の寄り合い所帯で、当時は教会内のカトリック主義者と福音主義者との間の対立が激しく、多くの宣教師たちはこれを日本にまで持ち込んでいたため、しばしば激しい論争となり、また互いに不信感をつのらせていたのである」^{注③}という状況であった。このような状況は、さらに次代が下がって、ポウフラワー師が南東京地方部の主教に就任した当時(一九〇九・明治四二年)の次のような様子からもその一端が窺える。

「南東京といつても明治末年までは、地方部内のCMSの教会とSPGの教会は何の交渉もなく、地方会のほか教役者修養会も聖職の会合も別々で、互に言葉も交さないといい敵視に近いものであった。(中略)一方これからCMSの人々は、SPGはハイチャーチだと、ややもすればけんか腰に議論を吹きかけるような空気があった。両者が研修会を共にしたのは大正四年頃鎌倉材木座の光明館で行ったものが始めてであるが、師(引用者注・ポウフラワー主教のこと)はそのとき『仲よくしてくださあいね』と一同をさとされた」^{注④}。

ヘーズレット師の来日、宣教・司牧活動は、CMSの先輩宣教師たちの宣教活動を引き継ぎ、更に発展させることが期待されるものであった。と同時に特に主教としてのリーダーシップは、このような両派間の融和や協調

をはかることを期待されるものでもあったといえよう^{注⑤}。

注① この節の記述は、主として、塚田①、および塚田④によっている。

注② 塚田③によれば、イギリスから派遣された第二代目の主教であるピカステス(CMS所属ではない)も「日本の教会は日本的でなければいけない」と強調しているから、この課題は宣教会の違いを超えたものでもあったことが窺える。

注③ 塚田③ iv頁

注④ 日本聖公会歴史編集委員会編『あかしびとたち』一一六頁

注⑤ ロウ、ハイ両派の軋轢は、その後も長く尾を引いている。一例として、福沢道夫司祭へのインタヴューを掲載した『神学院だより』64号によれば、「昭和二六年当時」ハイ・ローの対立で学校がなかなか始まらなかった」という回想が語られている。(同司祭追悼記念誌『聖霊は風のように』(二〇一五年)に再録。

四. 日本宣教に関する、英本国における評価と 在日英国人宣教師による論評

アイオン氏は、一八六九年一月四日付けで、ヨーク大主教がカナタベリー大主教宛^{注①}に送った書簡を紹介している。その書簡には、「わたくしは日本のキリスト教に相当な不信感を抱いております。あるいは近いうちに、

日本人がヨーロッパ的なものの考え方に嫌気を感じ、わたくしたちを、また同時にキリスト教を捨て去る日が来るかもしれない」^{注②}と書かれていたという。一八六九（明治二）年といえ、イギリス聖公会からの最初の宣教師が日本に送られた年である。新事業を開始するにあたって、その成否への疑念や未知の事態への不安が当事者の脳裏に去来するのは当然のことと思われる。しかし、それにしてもこの書簡の否定的な判断（その判断の根拠は、引用からは明らかではないが）には注目させられる。このようなヨーク大主教の懸念は、二〇年後の一八八七年^{注③}にも同じような内容で表明されている^{注④}。このような背景のもとで、日本の土を踏み、布教活動を展開した宣教師たちは、実際にさまざまな障害に遭遇した。

その一つは、これを自派宗門への脅威とみなす仏教界からの有形無形の妨害であり、その中には伝道説教中の暴力行為もあった。一方、大部分の一般庶民にとっても、キリスト教は、長い禁教の歴史の中で身についた「邪教」とのイメージが強く、「やそ」と呼んで畏怖し忌避する対象であった。また、とりわけ政府は、禁教令を解き、体面上は信教を認めたとはいえるものの、対キリスト教の姿勢は消極的であり、しかも時を追ってその否定的姿勢を強め、結局は、太平洋戦争の敗戦に至るまでこれ

を抑圧する道をたどった。

外国人宣教師は、これら日本の状況と並んで、キリスト教道徳への信頼を損ねるような自国商人の悪徳商法の非を糾したり、本来自国の側に属する思想や価値観がキリスト教への障壁となる事態にも対さなければならなかった。それは、例えばC・M・ウィリアムズ(Channig Moore Williams) 主教が憂慮した功利主義であり、あるいはまた、E・S・モース(Edward Syvester Morse)^{注⑤}らによって広められた進化思想であった。「一八七九年以降、東京帝国大学では、加藤弘之^{注⑥}らの知識人集団がモースを支持し、ダーウィン主義的な思想の普及に努めていたのだが、東京帝国大学内の英語エリートの影響力を何としてでも低下させようと望み、また、キリスト教的な傾向をもつ英語圏出身の外国人教師らを大学から追放しようとしていた人びとの中で最も活発だったのもまた、この加藤らの集団であった」^{注⑦}とアイオン氏は指摘している。

これらの妨害や忌避に遭遇した上で、英国人宣教師が抱いた日本（人）観、あるいは日本への布教の展望はどのようなものであったのであろうか。次にいくつかの代表的な論評を取り上げてみよう。

(一) イギリス聖公会から日本に派遣された第二代目

の主教である、E・ピカステス (Edward Bickersteth) 師^{注85}は、インドなど英国の植民地とは根本的に異なる日本の特殊性について、以下のような認識をもっていた。

「日本は外国に支配されたことが一度もなく、住民は独立心が旺盛である。あのインド——英国に支配され、特権階級もあり、『大君主』のいない生活を住民がまったく経験しないまま、ほぼ一千年が経過しようとしているインド——では妥当な方法であっても、それをそのまま日本に持ち込むわけにはゆかないのである」(Fenn 氏への報告)^{注86}。「日本人のキリスト教徒は」一般的に言って、生計を立てるために他から助けてもらうことを嫌い、教育水準も高く、さらに、わたくしたちが主催した会議が証明いたしておりますように、特定の問題について議論を戦わせるのが巧みで、論点について鋭い認識を見せる者も少なくありません。その一方で相手を思いやった指導や教示には素直に従います」(カンタベリー大主教、E・ベンソン主教への報告)^{注87}。

このように、ピカステス師ら実際に日本での活動に従事した宣教師にとっても、日本は伝道地として一筋縄ではいかぬ土地であると認識されていたことが窺える^{注88}。

(二) 塚田理氏は、(1) ピカステス、(2) A・リー

(Arthur Lea)^{注89}、(3) L・B・チャモレー (Lionel Berners Cholmondeley)^{注90}ら三人のイギリス人宣教師による、日本の国家主義体制と日本人の宗教に関わる精神的風土に対する見解を紹介し、併せてそれらに論評を加えている^{注91}。

(1) ピカステスに関して塚田は、「明治憲法の『信教の自由』に関する条項について、ある一定程度の評価を与えながら、同時に反キリスト教的雰囲気を知り、キリスト者が慎重にそれに対応して行く用意を怠ってはならないことを指摘した」と述べている。

(2) アーサー・リーに関しては、次のような、日本人のキリスト教受容の困難点への指摘を紹介している。
*物質的な〈御利益〉を中心にして、〈方便〉としている日本人の宗教観。*日本人の〈神〉観念——特に先祖・英雄崇拜、死人はすべて〈ホトケさま〉になるという考え。*唯一神に関する観方の困難。*日本における教育の性格——超自然的、霊的世界の一切を迷信として斥ける教育の普及。*その他、キリスト教独自の教理——例えば、三位一体、受肉、贖罪等の教理^{注92}。

塚田は、アーサー・リーが以上の諸点と並んで、「恐らく最大の困難として、キリスト教は国体に合わない。(それは、)キリスト教は日本民族主義の精神と合致しないことを意味している。(キリスト教は、)日本国家が体

現している歴史、諸原理、及び理想に適合しないということである。(中略) 今や(日本において) 神格化されている方(引用者注・天皇のことを指すと思われる)は、人々の間に高い特権と高い責任を有する者としてのその位置を占めることなるう」と確言していることに注目し、この見解について、「このように、リーは極めて的確に、当時の日本人の間に拡まりつつあった『国体』観を批判し、その本質を見抜いていた」と高く評価している。と同時に塚田は、「しかし、事態は、彼が希望していたような、日本人の忠誠心や国体観のキリスト教による修正という方向とは逆の方向に向かって進んで行ったのである」と、その後日本がたどった道について批判的に論じている。

(3) さらに塚田は、特に、日露戦争以降、天皇制絶対主義国家として進もうとする日本の事態の本質を捉えたものとして、チャモレーの視点に極めて高い評価を与えている。チャモレーによれば、近代国家「日本」とは、一方では、西欧列強の仲間入りするために、近代化路線を突っ走る民族主義国家であるが、それと同時に、他方では、民族的自負と統合の源泉として、国家神道を標榜する宗教的統体としての宗教国家である。チャモレーは、この「日本」を、個人の集合としての「日本人」と区別し、しかもこの「日本」が、いかにして「日

本人」の魂を支配して来たかを明らかにしている。塚田は、このような「支配」による日本人の精神構造は、(現在においても) われわれが、「当時の日本人キリスト者たちが、日本の『国家的要請』に対しては従順に服従したことを肯定し、(一方、) 個人的な精神的・道徳的生活においてはキリスト教信仰に従うという、言わば『公人』と『私人』との生活原理を使い分けること」^{注⑥}によく現われていると述べて、チャモレーの指摘が、現在のキリスト者にもみられる態度であるとして、その視点の時代を超えた普遍性に注目している。

(三) 一方、アイオン氏は、キリスト教運動への圧力が一段と高まる中で来日し、その状況に直面したボウフラワー主教の主張を紹介している。それによれば、ボウフラワー師の主張は、前任者たちの認識よりもさらに厳しさを増している。同主教は、宮内省、文部省、陸軍省こそ、キリスト教への敵意を生み出している三つの主要な拠点であると考えていたという。同主教によれば、その敵意の根底にあるのは、以下のような感情であった。

「キリスト教は、彼らの憲法の基礎をなす中心的なフィクション——もはや二〇世紀だというのに、最も教養ある日本人(たとえば『欧州教育講演録』を著した菊池(大麓)^{注⑦}男爵さえ嬉々として戯れているかに見えるフ

イクシオン——を破壊しかねない、という感情があるのです。天皇こそ「神の子孫であり、日本人にとつては比類なき「最高存在」である（！）」というフィクションがそれです。「国家宗教」が神道なのも、ここから理解できるでしょう。神道は、もともとはきわめて単純な自然崇拜なのですが、太陽の女神を天皇の祖先と位置付け、祖先崇拜を吸収することにより、愛国心の高揚にもすぐれた効果を発揮するようになった、というわけです。ただしその一方で政府は、神道が万人にすんなりと受け入れられるよう、神道は「宗教」ではない、それは仏教やキリスト教などと違い、宗教団体として登録されるべきではない（！）などとも言っているのです」^{注⑧}。

アイオン氏は、右のような、宣教師たちの見解を俯瞰しながら、日本人キリスト者の信仰に関わる根本的な問題として、次のような氏自身の問題提起を行っている。「キリスト教を受け入れてはならない」という神学的、宗教的な反論に加えて、日本人のキリスト教徒にとつてのアキレス腱は、信者になれば日本への忠誠心を——否、日本人性すら——失うのではないかという、キリスト教徒ではない日本人の心に浮かんた疑念であった。日本人であり、なおかつキリスト教徒であることの困難は、多くの信者にきわめて大きな精神的負担を強いるもの

だった。早くも明治時代の末に至ると、独立した教会組織を日本で形成し、西洋諸国の宣教師によって進められているものとは区別される『日本のキリスト教』を創るべきだ、という声も出始めた。さらに、キリスト教徒に愛国心が求められ、同時にナシヨナリズムが一般に台頭してきたため、日本人によるキリスト教運動は、日本の海外拡張主義の支援と結びつくようになり、この傾向は、日露戦争以降、顕著になってゆく。東アジア大陸での日本の帝國的、軍事的な野心を支持することによって初めて、キリスト教徒は、周囲からの疑念を払拭し、日本への忠誠心を証明できたのである」^{注⑨}。

注① この時のヨーク大主教は William Thomson (在任一八六二—一八九〇年)、カンタベリー大主教は Archibald Tait (在任一八六二—一八八二年) である。

注② Lambeth Palace Library (以下、LPL) と略記) Archbishop Edward White Benson Papers (以下、Benson Papers と略記) volume 141. Archbishop of York to Benson, 4 January 1896. アイオン^③三一—一九頁より引用。

注③ 当時のヨーク大主教は、引き続き Thomson 師である。従って同師は、約二〇年間にわたり、日本への宣教の疑義を晴らさなかったことになる。

注④ 出典は、LPL Benson Papers, volume 65, Bikerstes to Benson,

August 26 1887. Memorandum on the formation on the Ecclesiastical Province in China and Japan. 引用は、アイオン③三三四頁による。

注⑤ アメリカの動物学者。一八七七(明治一〇)年に来日し、大森貝塚を発見した。同年、東京大学の教授に就任。当時の東京大学の外国人教授の大半が研究実績のない宣教師であったためにその刷新をはかった。日本で最初に進化論を体系的に紹介した。

注⑥ 一八三六〜一九一六 政治学者。帝国大学(現在の東京大学)の第二代総長、帝国学士院院長などを務めた。

注⑦ アイオン③三三二頁

注⑧ ケンブリッジ大学のペンブルック (Penbrooke) ・カレッジを卒業。ロンドンでの牧会活動の後、インド、デリーでの宣教活動に参加した。病を得て帰国後、日本に派遣される主教として按手される。日本での在任は、一八八六・明治一九年から一八九七・明治三〇年まで。ウィリアムズ主教らとともに、日本聖公会の組織成立に尽力した。

注⑨ LPL, Benson Papers, volume 52. Bickersteth to Penn, March 11 1887. アイオン③三三三頁より引用。Pennとごう人の詳細は分からないが、C.P. Williams という人の、スリランカの聖公会の自立の問題を扱った論文にその名前が頻出している。

注⑩ LPL, Benson Papers, volume 52. Bickersteth to Benson, March 10 1887. アイオン③三三三頁より引用。

注⑪ ただし、そのピカステスも(少なくとも)来日した当初は)

「日本がキリスト教化される日も近いと考え、その時キリスト教が国教化されるとすれば英国教会の伝統が日本の国情に適合しているという意見をSPGの報告の中で述べている」。塚田④七八頁

注⑫ CMS派遣のイギリス人宣教師。一八九八年来日。一九〇九年から二六年間、九州地方部の主教を務めた。福岡神学校を設立し聖職者の養成にも力を注いだ。

注⑬ 現地での発音は、「チャムリ」の表記に近い。SPG派遣のイギリス人宣教師で、在日期間は一八七七年〜一九二二年まで四五年間におよぶ。その間、ピカステス主教のチャブレンを務めたほか、東京牛込の昇天教会(後のバルナバ教会)の司牧、小笠原諸島への宣教、東京専門学校(早稲田大学の前身)の教師、イギリス公使館チャブレンなどを務めた。以上の経歴は、名取多嘉雄「チャモレー師について」『英国人宣教師ライオネルチャモレー師の日記』①(四〜六頁)による。

注⑭ 塚田②四六〜六九頁

注⑮ 引用者評「これらは、現在にあってもなお(否、却って強化された)日本人一般の宗教意識といえよう。

注⑯ 塚田②六七頁。引用にあたり、文意を明確にするために、文章に微修正を加えた。

注⑰ 数学者、政治家。ケンブリッジ大学で数学、物理学を学び、クラスで首席を通したと言われる。東京大学教授から総長、理化学研究所初代所長、文部大臣などを歴任した。

注② LPL, Archbishop Randall Thomas Davidson Papers, volume

383, Japan 1910-1924, Cecil Boufflower to Davidson, August 15

1910. アイオン③三二八頁より引用。

注③ アイオン③三二二―三二二頁

五. 南東京地方部の経緯と歴代主教

日本への伝道開始以来、英米各ミッションは相互の連絡や調整のないままに、宣教活動を進めてきた。これはやがて、三伝道協会間の協調関係のありかた、及び主教権をめぐる問題を生じさせることとなった。各教会の管理運営にあたっての区画区分と、それを管理する主教の管轄権の問題は、日本聖公会が組織として成立発足した一八八七（明治二〇）年の第一回総会以来の懸案であった。一八九一年に提案・実施された、本州を二分し、それに九州一円と北海道一円とを合わせて、四地方とする施策をもとに、一八九四（明治二七）年の臨時総会で、全国に以下の六「地方」が置かれるようになった。カッコ内は運営にあたるミッション名である。

東京北部地方（米国聖公会）

東京南部地方（英国SPG）

京都地方（米国聖公会）

大阪地方（英国CMS）

九州地方（英国CMS）
大阪地方（英国CMS）

この「地方」の設定は、それまで宣教に携わってきた各ミッションの関与を引き続き継続することを前提としたものであることは明らかである。一八九六（明治二九）年の第五総会で各「地方」は「地方部」と呼ばれることとなった。

英米ミッションとは別に、カナダ聖公会は、一八八八年から、主として中部地方で宣教活動を行ってきたが、一九二二（明治四五、大正元）年、南東京地方部から、新潟、長野、愛知、岐阜の四県が分離され、「中部地方部」が成立した。中部地方部の分離・成立に伴い、南東京地方部の区画は、東京府の一部、千葉、神奈川、静岡、山梨各県となった。

一九二三（大正一二）年、大阪教区と並んで東京教区が発足するにあたり、南東京地方部から聖アンデレ教会ほか一〇教会が、また、北東京地方部からは聖三一教会ほか一五教会が東京教区に移されることになった。（但し、聖路加病院、立教学院、立教女学院などの諸施設は、従来に引き続き北東京地方部の所管に留まった。）新生の二つの教区には、初めての邦人主教である名出保太郎^{註④}（大阪）、元田作之進^{註⑤}（東京）の二師が就任した。それに伴い、南東京地方部は、長らく主教座聖堂として

きた芝聖アンデレ教会を東京教区に移管し、それに代わる主教座聖堂を横浜に移すことになったが、その移管がスムーズに行われたことは、特筆に値することと言える。一九四一年の第二〇回総会において、従来の二教区八地方部制を廃止し、一〇の教区が設置されることとなった。南東京地方部も南東京教区となった。

南東京地方部、南東京教区の戦前までの歴代主教とその在任期間は以下の通りである。

1. E・ピカステス (Edward Bickersteth) S P G
一八八六(明治一九)年四月(来日)～一八九六(明治二九)年二月(離日)
2. W・オードレー (William Awdry) S P G
一八九八(明治三二)年八月～一九〇八(明治四二)年一月
3. S・H・ポーフラワー (Cecil Henry Boufflower) S P G
一九〇九(明治四二)年二月～一九二二(大正一〇)年一〇月
4. S・ヘーズレット (Samuel Heaslett) C M S
一九二二(大正一一)年五月～一九四〇(昭和一五)年一〇月
5. 須貝 止
一九四一(昭和一六)年九月～一九四七(昭和二二)年

八月

注① 大阪三一神学校、築地の東京三一神学校で学ぶ。神田基督教會、大阪川口基督教會などを司牧。

注② 大阪の川口英和学舎で学んだ後渡米し、フィラデルフィア神学校、ペンシルバニア大学、コロンビア大学などで学業を修める。帰国後、立教中学校校長、立教大学学長を経て東京教区主教に就任した。

六：南東京地方部主教としてのヘーズレット師

前節で述べた経緯からも知られるように、「この教区(引用者注・南東京地方部)の大部分は、C M Sとは別の、S P Gによって支えられていた」^{注①}のであり、前代諸主教がS P G所属であった後を継いで、C M Sのヘーズレット師が主教に就任するのは、彼の職務遂行の大変さを示すそもその事態であったと言えるかもしれない。

同教区の主教選任にあたって、カンタベリー大主教^{注②}は、前任のポウフラワー主教が日本語に堪能とはいえず、そのために苦労や葛藤を抱えていた^{注③}ことから、後任は日本語能力に優れた候補者であることを重視した。ヘーズレット師の言語能力は南東京教区の主教に任命された重要な要件であった。もちろんそれだけではな

く、「幸いなことに、ヘーズレットは、機知に富んだ食後のスピーチや、アイルランド人特有のユーモアで知られていた。彼はまた、文章をよく書き、その手紙の一部には、日本の宗教的、政治的状況に関する洞察に富んだコメントが含まれている」^{注④}、との人物評からも、また、同師との接触が深かったある聖職による、「南東京地方部時代の長い歴史を通じて、種々な困難のうちに優れた統率力でよく地方部を導く一方、円満な人柄とユーモアに富んだ言葉で人々に親しまれ、温容今もなつかしめるのは主教サムエル・ヘーズレット師である」^{注⑤}との記述からも、親しみやすく円満な人柄が、主教としての働きに資する点が大きかったことが偲ばれる。南東京地方部の年表によれば、一九二六（大正一五）年四月に「鎌倉、材木座の光明館で、SPG・CMS合同研修会を行う」^{注⑥}とわざわざ記述があることから、ヘーズレット師が主教に就任した後でも、両派の間に依然として何らかの壁が存在していたことが伺え、同師の穏やかな人柄にもとづくリーダーシップが発揮されたことが察せられる。

さて、アイオン氏が指摘している「イギリスの宣教師活動の弱点を明らかにするだけでなく、日本での英国の影響力のより一般的な衰退」という記述（本稿の第二章）について、それがヘーズレット師の主教としての働きの、具体的にはどのような形で現れたのかを見てみよう。

アイオン氏によれば、「一九二一年六月には、南東京教区でSPGによって派遣されている欧州からの聖職は四人だけで、その内の二人は帰国中であった。一〇年前には、一〇人の宣教師司祭が在任していたのだが……。確かに、一九〇八年以来、SPGの聖職宣教師は新しく任命されてこなかった。CMSは、その最後の聖職宣教師が一九一六年に到着しても状況はほとんどよくはならず、一九二三年までに、経費節減や宣教師の退職に関する新たな規制は、日本全国を通じての男性と女性の宣教師の合計数を六〇から四〇に減らすという脅威をもたらした」^{注⑦}という状況であった。また、ヘーズレット主教は、最初の邦人主教が二人とも米国聖公会系で、「神学的に、世俗的に過ぎる」ことに危惧の念を抱いていた。また日本人聖職者の海外での教育・訓練の機会も米国に比べてイギリスでは少なく、その結果、将来の日本人主教はますますアメリカ聖公会系となり、その結果、日本国内での英国の影響力は必然的に弱まらざるを得ないと考えていた^{注⑧}。

このような英国の衰退減少は、ヘーズレット師が南東京地方部監督に就任した翌年の一九二三（大正一二）年九月に起きた関東大震災への救援の際に、より具体的・実態的な姿で露呈した。

「幸いなことに、ほとんどの宣教師はまだ軽井沢での夏休みで離れていたもので、地震で亡くなった英国人宣教師はいなかった。また、南東京教区は生命の損失を被っていないかった。ヘーズレット自身は北海道にいたが、東京に戻り、横浜、小田原と秦野で教会や牧師館が完全に破壊されたことを知った。損失は推定四万五千ポンドであったが、東京教区での米国教会ミッションが負う二十万ポンドの損害と比べて小さかった。東京教区では、地震前の二三の教会のうちわずか三ないし四だけが無事であった^{注9)}。(中略)アメリカの聖公会は、義援金十萬ポンドを素早く調達することができたが、SPGは一九二四年二月まで一万二千ポンドばかりの、そしてCMSは情けないことに、わずか三千ポンドだけを調達した。」^{注10)}

緊急事態に対する望ましい支援のありかたは、勿論、義援金の多寡だけで云々できないし、すべきでもないと考えられるが、右の金額の差は、各宣教団体の、日本聖公会への力の入れ方と、その影響力の状況が反映されていると言わねばならないであろう。

このような、イギリス聖公会の衰退は、どこから生まれたのであろう。その理由を推察・整理しておこう。アイオン氏によれば、その一つは、イギリス本国でくすぶっていた日本宣教への懸念が、結局払拭されずに終わったことであり、「かりに英国人宣教師に何か大きな

失敗があったとしたら、それは、ヨーク大主教が認めた『日本のキリスト教に対する相当な不信感』、この『不信感』を、英国側の教会の頂点を構成する人びとから一九四一年以前に拭い去れなかったことにある」^{注11)}としている。この点について同氏は更に、「宣教師は、天皇崇拜を進めようとする政府の政策は布教を妨げると正確に認識していたが、それへの具体的な対応はなかなかとれなかった。宣教師がしたことといえば、この挑戦は「宗教と愛国心を同一化し、天皇の祖先というよりはむしろ、現在の天皇を忠誠と犠牲的献身の対象とする」試みだと認識するくらいだった」と指摘している^{注12)}。そして、「第一次世界大戦後、英国人宣教師は、日本のキリスト教化における自分たちの目標や役割について、しだいに確たる見通しを失っていった。(中略)対日布教活動を続けるべきかという疑問の声すら出ていたのである。この時期(一九二〇年代前半)に不安材料となっていたのは、英国海外福音伝道協会の弱体ぶりであった。すでに約一五年間、英国海外福音伝道協会は、イングランドから日本に赴任する宣教師を一人も任命していなかったのである」と状況を説明している^{注13)}。

このような事態は、同氏が指摘するように、政治・国際的視野から大局的にみれば、「大英帝国の衰退」の前途の一つと言えるであろう。「この迷いや、決断の放

棄は、その底の病根をも示しているように思われる。すなわち、意欲喪失がそれである。この意欲喪失は、さらに深刻な自信喪失―海外における英国の衰退と弱体の兆候であった自信喪失―の先触れとなるものであった。布教活動の衰退は大英帝国の衰退を先取りしたものである」^{注④}

ただし、このような事態を打開しようとするヘーズレット主教の努力の後ろ楯となったできごともあった。カンタベリー大主教ダビッドソン (Davidson)^{注⑤}は、イギリスの宣教師活動や日本聖公会が直面している困難を考慮し、イギリスの教会が、どのようにすれば、日本聖公会を助けることができるかを探る必要性から、一九二四年に日本に特使として聖オーガスティンカレッジ (St Augustine's College) の学長である、アーサー・ナイト (Arthur Knight) 主教を派遣したのである。ナイト主教は、日本における英国の宣教師活動が続ける必要性があることを報告した。その結果、すでに一九一〇年に来日していたB・シンプソン (Basil Simpson) 師を神戸地方部主教に任命し、新たにイギリスから北海道地方部にG・J・ウォルシュ (Gordon John Walsh) 主教を送るなどの関与・支援回復の動きが促進された^{注⑥}。

そしてこの未曾有の大災害は、この難事へのヘーズレット主教の献身的な対応が、教区民の同師への信頼感

を更に高める機縁となったこと、また「それは、日本聖公会の震災後の精神的な再建（つまり、信徒が定期的に礼拝に出る習慣を徐々に取り戻させていた）となっており、そのことを一人の高齢のSPGの宣教師は、物質的な再建よりも重要であると考えた」^{注⑦}という結果を招くことにもなった。

注① アイオン④ p. 444

注② Randall Davidson 主教

注③ アイオン① d. 60 Archbishop of Canterbury to Canon Waddy, May 29, 1925 spg Series D. 1925, USFGA

注④ アイオン④ p. 444

注⑤ 村岡米男・他「S・ヘーズレット―南東京の慈父―」日本

聖公会歴史編纂委員会編『あかしびとたち』一三〇頁

注⑥ 日本聖公会横浜教区歴史編纂委員『み名によりて』二七九頁

注⑦ アイオン④ p. 445

注⑧ 上と同じ

注⑨ 引用者注II 関東大震災による教会の倒壊・焼失状況は、資料によりまちまちであるが、東京では、聖三一教会、深川真光教会、聖慰主教会、聖パウロ教会、聖ヨハネ教会、諸聖徒教会、聖愛教会、神田基督教会、信愛教会、月島聖公会などが被災した。また築地にあった立教中学校、立教女学院も焼失、池袋の立教大学も大きな損傷を受けた。南東京地方部では、横浜聖ア

ンデレ教会、返子聖ペテロ教会、小田原聖十字教会、秦野聖ルカ教会、館山聖アンデレ教会など八教会が被災したとある。

注⑩ アイオン④ p. 447

注⑪ アイオン③三二八頁

注⑫ アイオン③三二八頁

注⑬ 同 三二九頁

注⑭ 同 三二七頁

注⑮ Randall Davidson 在位一九〇三―二八年

注⑯ しかし、C M Sは、その後も北海道地方部への支援を停止し

ようとする動きを見せ、ウオルシユ主教就任後も、一九二四

(大正一三)年にはこの地域からの撤退を計り、結局、支援額を

二割減として、各教会の自立を勧告した(渡辺政直「G・J・

ウオルシユ』『あかしびとたち』一四四―四五頁)

注⑰ LPL Davidson Papers, volume 394, Japan 1924-1926.

R.D.M.Shaw Memorandum on Japan, June 1924. アイオン④ p.

447より引用。

七. 日本聖公会を代表する主教としての

ヘーズレット師

ヘーズレット師は、南東京地方部主教の任務を負いながら、J・マキム (John McKim) 注⑱ 主教の後を受けて、一九三五(昭和一〇)年に、日本聖公会全体を代表する

立場である、総会議長、主教会議長などの役割(現在の首座主教にあたる)を担うことになった。その責を担う立場となったヘーズレットを待ち受けている状況は日に日に厳しさを増していた。一九三六年八月、駐日英国大使サー・ロバート・クライヴ (Sir Robert Clive) 注⑳ の書簡の中で、師はこう窮状を漏らしている。「条約によつて認められていた特権や権利を大幅に削減し、われわれの行動を制限する動きが周囲の至るところで生じております。この帝国で布教活動を開始し、拡大せよと言われてきたわけですが、その根底にあつた条件自体が大きく変化してしまつたのです」注㉑。

このように政治的、社会的状況が厳しさを増す中でも、日本聖公会は、一九三七年の組織成立五〇年を記念して、四月に華々しい記念行事を繰り広げ、ヘーズレット主教もその主宰者としての役割を担つた。微増ながら教勢も拡大伸長し、この年には、会員数四万三〇〇〇人というピークを迎えたのである。しかしその行事の余韻に浸る暇も与えず、ヘーズレット師ら英国人宣教師たち、そして日本聖公会を窮地に追い込んだ事態が発生した。

一九三七年秋、中国北部での日本の軍事行動に抗議する集会がロンドンのアルバート・ホール (Royal Albert Hall) で開かれ、カンタベリー大主教のコズモ・ラング (Cosmo Lang) 師がその議長を務めたのである。これ

は、イギリスの新聞社『ニューズ・クロニクル (News Chronicle)』^{注④}が企画したもので、集会の目的は、日本軍による中国での無差別爆撃に抗議することであった。集会の直前、N・チェンバレン (Nevil Chamberlain)^{注⑤}英国首相はラングと会見し、主教が議長をつとめれば、かえってマイナスの効果が生じるかもしれない^{注⑥}、と警告した。しかし抗議集会への参加を明確に禁じたわけではなかったことから、ラングは議長就任の決断をしたのである。

日本在住の英国人宣教師レオノラ・E・リー (Leonora Edith Lea)^{注⑦}は、折しも休暇で帰英中であつたので、この集会に立ち会う機会をもつた。その時の様子を回想記^{注⑧}の中で記している。会の実際の様子を伝える記録であるので、文末に資料(一)として引用しておく。この記録からは、全体としては整然として行われた集会のなかで、ひとときわ目立つ煽情的な発言もあつたことが窺える。

この事件が、日本の新聞で大きく報道されると、日本聖公会は、教務院会議開催中であつたこともあり、直ちに対応の措置をとつた。『キリスト教週報』には、そのことを伝える激しい調子の記事(文末の資料(二)参照)が載せられた。この記事には、「支那の悪宣伝に乗ぜられた認識の不足よりせる判断に基づき、大監督とも

あろうものが此くの如き集会を司ることの不条理」というアジェンションのような表現が用いられており、日本側の受け止め方の様子が推測できる。これに対してラング大主教は、同年一〇月二七日付でヘーズレット主教宛に、資料(三)のような返書を送つてきた。

この書簡の中で、ラング師は、「当時我らが事実として知り得たる処に基けば、それは基督教の主義にも人道の主義にも一様に影響を及ぼすことと見へたから、私は沈黙を守ることが出来なかつた」と、この会を主催した動機について述べている。ラングは、駐英日本大使・吉田茂に説明する手紙の中でも、同じ趣旨を次のように記している。「わたくしは、わが国における道徳的な世論、とくにキリスト教的な世論を代表する、という立場にあり、こうした感情を何らかの形で表明することを断るわけにはゆきませんでした。もつとも、その際に、適切な慎みは忘れないようにいたしたく思います」^{注⑨}。

しかし、ラング主教のこのような「配慮」にも拘わらず、この事件がもたらした日本聖公会への影響は甚大であつた。例えば、当時、聖公会神学院の教授であつたK・サンスベリー (Kenneth Sansbury)^{注⑩}が母国に報告したところによれば、松井米太郎^{注⑪}東京教区主教は、ラング大主教の行為は「われわれと英国の教会との関係終了」を意味する、とまで発言したといふ^{注⑫}。

さらに塚田理は、「『アルバート・ホール事件』」は、その後の日本聖公会に対する特高警察や憲兵隊の介入や弾圧、特にヘーズレット、須貝、佐々木三監督のスパイ容疑による拘留などに影響を与えるたことは疑いない。」^{注⑤}と述べて、この事件が、ヘーズレット主教拘禁に繋がり、二人の日本人主教逮捕の遠因ともなつて、日本聖公会の致命傷ともなるものであつたと指摘している。アイオン氏もこの見方を支持し、ラング氏の行動について以下のように論評している。

「大主教ラングは、クリスチャンと人道主義者としての立場から行動した。しかし、その結果による、日本聖公会と、日本における英国の位置に対しての考慮が欠けていたことは明らかである」^{注⑥}。「ラングが行つたことは、英国人宣教師活動と日本聖公会に注目を引かせた。アルバートホールの事件は、キリスト教の原理および人道主義者の衝撃と、日本人の感性とナショナリズムの衝突を顕わにした。このことは、反英感情を惹き起こすための身代わりとして、英国の宣教師の活動を利用する口実と、日本におけるキリスト教を外国の管理と影響から解放するための口実を日本の当局に提供した」^{注⑦}。

注① アメリカ聖公会派遣の宣教師。一八八〇年から一九三五年までの五五年間日本聖公会のための貢献。その間、ウイリアムズ

主教の後を継いでの江戸監督、北関東地方部主教、立教大学理事長などを歴任した。

注② 第二代駐日英国大使 任期一九三四～三七年

注③ アイオン① p. 228 およびアイオン③ 三三〇頁

注④ イギリスの大衆紙で、一九〇六年に『The Daily Mail』に買収された。

注⑤ 一九三七年五月から四〇年五月まで、イギリス首相を務めた。ドイツ、イタリアとの間に融和政策をとり、その立場から妥協的なミュンヘン協定を結んだ。

注⑥ I.P.L. Lang Papers, volume 7: Memorandum of Meeting with the Prime Minister, October 1937. アイオン④ p. 448より引用。

注⑦ SPG派遣の宣教師。前出のA・リー師の息女。太平洋戦争中も帰国せず日本にとどまった。戦後、松蔭女子短期大学の学長を務めた。

注⑧ レオノラ・エデイス・リー「戦中覚え書」『松蔭女子学院史料』第8集

注⑨ アイオン③ 三三三頁 およびアイオン④ p. 448～449

注⑩ 聖公会神学院教授 日本での経験は、オードリー・トークス著、松平・北條訳『二つの日本』（聖公会出版 二〇二三）に詳しい。

注⑪ 元田作之進前監督の死去に伴い、一九二八（昭和三）年に東京教区主教に就任した。立教学院理事長も務めた。

注⑮ USPGA, South Tokyo Letters Received 1938, Kenneth

Sansbury, circular letter no. 1, October 7 1938. アイオン①d.

202より引用

注⑬ 塚田② 一八五頁

注⑭ アイオン④P. 452

注⑯ アイオン④P. 453

八. コズモ・ラング・カンタベリー大主教について

ここでラング主教のプロフィールと経歴を概観しておく。注⑰。ラング主教は、ヘーズレット師が日本で主教としての働きを進めている大部分の期間、カンタベリー大主教の座にあった(在位一九二八年二月四日〜一九四二年五月三日)。従って両者間には、職務上のやりとりや意見交換が時に応じて行われていたと考えられる。

ウィリアム・コズモ・ゴードン・ラング (William Cosmo Lang) は、一八六四年に、スコットランド北東部に位置するアバディーン州 (Aberdeenshire) のフイヴィー (Fyvie) で生まれた。父のジョン・ラング (John Marshall Lang) は、チャーチ・オヴ・スコットランド (長老派) の牧師であった。ゴードンは僅か一四歳で大学入学試験に合格し、グラスゴー大学に入学し

た。そして一八八二年の夏には、同大学を卒業し、続いて四年間、オックスフォードのベリオール・カレッジ (Balliol College) で歴史学を学んだ。ここでの学生時代に、ロンドンの、貧しい人々が多く住むいわゆる「イーストエンド」でのセツツルメント活動に携わっている。

大学を終えたラングは、ロンドンに出て、政治活動に携わることを目指して実務的な法律の勉強に取り組んだ。しかし、一八八九年の春に、オックスフォードの、カズドン・カレッジ (Cuddesdon College) での夜の礼拝に参加した彼は、召命の言葉が心に語り掛けているのを聞き、聖職者への道を歩むことを決意した。聖公会の聖職を目指そうとする彼に、長老派牧師である父は深く失望したが、最後には彼の決断を尊重し励ましたという。

そして一八九〇年に「執事」、一八九一年五月に、「司祭」の按手を受けた。彼の信仰的立場は、スコットランド教会での福音派的環境の下で育った経歴に逆らうかのように、英国国教会内のアングロ・カトリックの位置に立ち、その進歩派に与するものであった。

カズドンでの勉学に続き、リーズの教会 (Leeds Parish Church) の副牧師、オックスフォードのマグダレン・カレッジ (Magdalen College) のチャプレン、ポーツマス (Portsmouth) の教会などに赴任して、貧しい地域での牧会や、地域の刑務所でのチャプレンとし

ての活動などに従事した。

一九〇一年、ラングは、ロンドンのステプニー(Stepney)地区の補佐主教に就任した。ステプニーは、イーストエンドに位置し、かつて彼が学生時代に、セツルメント活動に携わった場所でもある。彼は失業問題に取り組み、また、英国聖公会男性協会 (the Church of England Men's Society = CEMS) の議長となり、会員数二万人に達する組織に育て上げた。一九〇九年に、ヨーク(York) 大主教に推挙され就任した。カンタベリー大主教と並ぶこの要職に四四歳という若さで、また教区主教の経験を持たない者が就くことは異例であった。就任後間もなく、彼はこの地域の教区を分割、新設(例えばシェフィールド = Sheffield 教区)する機構改革や、社会・経済・労働問題への取り組みを行っている。主教就任に伴う国会 upper 議員としても活躍している。

一九一四年に第一次世界大戦が勃発すると、反・ドイツの姿勢を鮮明にし、管掌地域内の聖職たちに従軍チャレンへの志願を勧める一方、自らも前線に赴いて兵士の激励と慰問を行っている。

大戦終了後は、特に教会一致に向けた活動が目立っている。具体的な成果を得るまでには至らなかったが、彼の努力は後に続くエキュメニカル運動の先鞭をつけたものとして評価されている。一九二六年にはエリザベス女

王に洗礼を受けている。

一九二八年に、前任者ランドール・デイヴィッドソン(Randall Thomas Davidson) 主教の辞任に伴って、カンタベリー大主教に着坐した。就任後数年間、健康を害して療養したが間もなく回復し、再び教会一致への活動を強め、正教会、オールド・カトリック教会などとの対話を進めた。この頃ラングは、かつては深く関心を寄せた貧困問題や社会改革の問題からは遠のくようになっていた。一方で師は、国際問題に関して活発な発言を続けていた。その一例は、ドイツ政府の反ユダヤ主義への非難であり、ヨーロッパのユダヤ人支援やエチオピアへの支援活動である。エチオピアの自国植民地化を目指すイタリアは数次に及ぶ侵攻を企て、一九三五年には、毒ガスをを用いるなどして同国を攻略し、その野望を遂げた。ラングはこれに抗議し、アビシニア(Abyssinia = エチオピアの旧称)兵への医療支援を訴えた。また、スペイン内戦の際のドイツ軍によるゲルニカ攻撃や、日本軍の中国におけるに対する無差別攻撃に対しては批判の先頭に立った。

国内問題では、死刑廃止論、離婚承認問題、教会税問題、公立学校における宗教教育問題などが検討の対象となった。これらと並ぶ大きな問題は、一九三七年におきた国王エドワード八世(Edward VIII)の、アメリカ女

性シン普森夫人との結婚問題であった。ラングは同夫人との交際をやめるように説得を図ったが成功せず、国王は結婚を選択して退位する。ラングはこの問題に対して国王に厳しい発言を行っている。

一九三九年に第二次世界大戦が勃発したが、ラングは無差別攻撃への反対を表明し続けている。一九四二年五月、カンタベリー大主教を辞任したが、上院議員としての役割は引き続き担った。一九四五年二月五日、国会に向かう途中、ロンドンのキューガーデン (Kew Gardens) 駅の近くで心臓発作を起こして倒れ、病院に運び込まれたが逝去した。享年八一歳であった。

注① ここで論じているラング主教の経歴や功績は、ウイキペディアの記事よっている。

九. ヘーズレット師の諸役職の辞任とその後

一九三七（昭和一二）年の組織成立記念行事の盛り上がりは、皮肉にも日本聖公会の組織が音を立てて瓦解する前触れでもあった。否、すでにじわじわと進んでいた土台の浸食がこの年を境に一気に加速されたと言わなければならない。その動きの中で、外国人宣教師を排除しようとする教会内外の動きも強まり、ヘーズレット師は

一九三七年の末までに、日本聖公会の総会議長、教務院総裁、主教会議長、出版社理事長、神学院理事長の五要職のうち、総会議長、教務院総裁の二つの役を辞し、日本人主教・名出保太郎主教に後を委ねた。しかし戦時色の強まりは、さらに容赦なくキリスト教会を巻き込み、日本聖公会側もその動きに巻き込まれ、あるいは自らを投じたのである。その一例として、一九三八年四月の終わりに、名出主教を議長として京都で開催された日本聖公会の第一九回総会では、時局を先取りするかのようになり、例えば資料(四)のような、「我等国民精神總動員ノ主旨ヲ体シ」「皇運ヲ扶翼シ奉リ」とする決議がなされている。

更に、一九四〇年の八月、救世軍の英国人と日本人がスパイ容疑で逮捕されたときに日本聖公会はいち早くその対応措置をとった。「組織の上部を英国人の宣教師が占めるという状況を放置すれば日本聖公会自体の存続基盤が揺るぎかねない」と憂慮した名出主教と松井主教は、四〇年八月の末、英米人の主教はすべて主教会から辞任するよう求めた。ヘーズレットは、日本側の要求に黙って従う他はないと判断し（中略）、この辞任要求によって対日布教活動には終止符が打たれたと考えた^{注①}とアイオン氏は述べ、その際の日本側の態度には「礼儀のかけらもなかった」とその非礼さを指摘している。

四〇年一〇月、ヘーズレット師は、他の外国人主教の辞任を促すとともに、自らも南東京地方部主教を辞した。そのことにより師は、他の外国人の主教たちと同様、日本聖公会との一切の公式な関係を断たれた。外国人宣教師の全面的な撤退がなされたのである。それに伴い、「地方部」から新たに名称の変わった一〇の「教区」に日本人主教が就任した。もとより、日本人聖職の管理運営のもとで、自主・自立の教会となることは、日本聖公会がその組織を成立させて以来の課題ではあったが、その実現は、教会の成長・発展に伴う自発的選択によるものではなく、このように、宗教の国家統制を図るために外国人宣教師を追放し、外国からの援助や指導を排除しようとする、国の宗教政策による強制、あるいはその強制への自らの自衛措置によってなされたものであった。そのような「自衛措置」も、しかし、聖公会の独自性を堅持することの保証とはならなかった。キリスト教プロテスタント各派との合同問題が、組織としての聖公会を根底から揺さぶったからである。すでに日本聖公会との公式な関係は断たれていたが、ヘーズレット師は日本基督教団への加入に強く懸念を示し、一九四一年九月にこう書いている。「この連合（日本基督教団）の将来について耳にするのは、疑問の声ばかりです。連合に靈的基盤など何もありません。それは、現実には、あらゆる党

派を一つの傘下にまとめ、同一の活動に従事させたいという、最近の日本政府の正気を逸した欲求を満たす試みなのです。私が推測する限り、個々の教会は以前と同様、それぞれの仕事をこなしており、新しい教会組織には何ら注意を払っておりません。（以下略）」^{注②}。

日本聖公会の日本基督教団への参加をめぐる分裂について、アイオン氏が行っている考察は、興味深い見解を含んでいるので、長くなるが以下に引用したい。

「名出主教、松井主教は、新しく主教となった日本人らとともに、参加を支持するグループの指導的な存在となった。しかし佐々木鎮次と八代斌助ら一部の人は、連合に参加しないことを（中略）選択した。政府の意向に反してでもアングリカンであり続ける、というこの選択をなさしめたのは、日本への愛国心であった。佐々木らがあえて当局に反逆したのは、日本基督教団が提供するものよりも、日本聖公会が代表する監督制度のほうが、日本人のキリスト教徒にとっては優れた宗教組織であると考えていたからである。これらの人びとは宗教的信念のためであれば投獄される覚悟ができていたとも考えられるが、かりにそうであったとしても、戦中に彼らが日本聖公会の存在を守りぬいたのは、ナシヨナリズムや愛国心が欠けていたからではなく、むしろそれらが備わっていたからであった」^{注③}。

アイオン氏のこの見解が正鵠を得ているとすれば、ナシヨナリズムや愛国心こそ、明治以来の日本人のキリスト教信仰の骨格となってきたものであり、それがキリスト教を支え、また逆にキリスト教を国家に服従させる元凶にもなったと言えるのではあるまいか。

注① アイオン③三三四頁

注② I.P.L. Lang Papers. Volume 185. 1942. Letter from Bishop Samuel Heaslett. September 16 1941. アイオン③三三四頁より

引用

注③ アイオン③三三四頁

一〇・ヘーズレット主教の逮捕・収監

ヘーズレット主教の逮捕・収監はスパイ容疑によるものであったと考えられるが、同主教に対する取り調べの過程で、その具体的嫌疑は次の三点であることが明らかとなった^{注①}。

(一)「我々は、お前たちが、公的な英国情報委員会の活動メンバーであると言う印刷物の証拠をもっている」。

(二)「我々は、お前が友人、特に、日本人に、日本の食糧問題、中国における戦争などについて話していると疑っている」。

(三)「お前は長く日本にいたので、言葉が良く分かり、あちこちに旅行をしているから、お前の知っている要点に基づいて、大使に情報を提供してきたに違いない。我々はそう信じており、だからお前はスパイに違いない」。

そしてこの嫌疑に対してヘーズレット師は以下のように書いている。

「以上が、全ての取調べの基本となっており、それはでっち上げであった。警察官の観念にあるこの考えを変えることはどうしても出来なかった。結局最後には、食糧不足があり、中国で戦争があり、兵士たちが行き来しているという、通常の事柄から生じるいかなるものでも、それらを知ることが疑わしく、いや、犯罪的な行為であると見なされることが明瞭になった。実に、日本に住む人は誰でも、目が見えず、耳が聞こえず、口が利けないことを自分で証明できない限り、逮捕され処罰され兼ねないのである」^{注②}。

結局同師は不起訴となり、満四か月を経た最終日に釈放された。上の文章にもあるように、全てがでっちあげであるこの逮捕は、さすがに起訴するに足る容疑を固めることはできなかったのである^{注③}。

注① 獄中記 九二〜九三頁

注② 獄中記 九三頁

注③ 塚田氏の論考および他のいくつかの史料では、ヘーズレット師の逮捕に適用された法令を「治安維持法」としている。しかし筆者は、獄中記の注で記したように、それを「国防保安法」であろうと推定している。スパイ容疑ということから見て、後者のほうがより適用に近いと考えられるからである。

一一・結びに代えて

塚田氏は、セロ・パウルス (Cyrill H. Powls) 氏^{注①}が、その著書『一九世紀ヴィクトリア朝の宣教師』^{注②}の中で指摘している、「芝派」^{注③}と呼ばれるイギリス人宣教師の特徴について、それが極めて的確であると評価している^{注④}。パウルスが芝派の特徴としてあげているのは次の諸点、即ち、「遠慮深さ」、「温情主義」、「愛国心」、「ヒューマニズム」である。これらの具体的内容をここで精査する余裕はないが、塚田が言うようにこれらは「極めて典型的な英国人気質を現すものと言ってもよいであろう」。ところで、ヘーズレット主教は、アンデレ教会構内に住んでいたことがあるとはいえ、この「芝派」と呼ばれる人たちとは、時代も所属宣教師協会も同じではない。しかし、ここで挙げられている特徴は、なんと同師にも当てはまることであろう。同師の特徴を、敢

えてこれに加えれば「ユーモア」「忍耐強さ」「寛容さ」などであろうか。

アイオン氏は、イギリス宣教師協会の非力と衰退を指摘しているが、しかし、宣教開始以来日本にわたり多くの障碍と不便と労苦の下で活躍した、英米加からの宣教師（女性を含む）は驚くべき数に上る。そして、ヘーズレット主教に代表されるような人格的特質がどれほど多くの日本人を信徒への道に導いたことであろう。そのことは私たちにとって忘れることのできない大いなる遺産である。

注① カナダ聖公会宣教師協会派遣の宣教師。一九四九年から一九七一年まで日本に滞在し、その間、カナダ聖公会代表、聖公会神学院教授を務めた。一九七九年には、東北教区主教に選任されたが、辞退した。

注② Cyril Hamilton Powles *Victorian Missionaries in Meiji Japan: the Shiba Sect. 1873-1900* Univ. of Toronto-York Univ. Joint Centre on Modern East Asia. 1987.

注③ 明治期に芝の聖アンデレ教会を拠点として活動したイギリス人宣教師。その代表はA・C・シヨウであろう。

注④ 塚田④二二五～二三三頁。

一二・付記

筆者は、本論の執筆にあたって、アイオン氏に、氏の所論の紹介・引用をしたい旨の連絡をとったが、同氏からはそれへの快諾とともに「私は、ヘーズレット師および、一九三〇年代に日本聖公会が遭遇したさまざまな困難を乗り越えるために同師が果たした努力に並々ならぬ敬意をいだいています」とのご返事をいただいた。

筆者がアイオン氏の論文に初めて触れたのは、オードリー・S・トークス (Audrey Sansbury Talks) さんから、アイオン④のコピーをイギリスから送っていただいたことによる。トークスさんはその著『二つの日本』の中で、太平洋戦争前の約一〇年間を、神学院教授として日本で過ごされた、父君・サンスベリー師について詳述している。サンスベリー氏は、来日当初に横浜港で、ヘーズレット主教の出迎えを受けて以来、同主教との親交が続いた。その関係は、両師が戦争のために日本を離れ、イギリスに帰った後も絶えることはなかった。トークスさんは、筆者とのメールのやり取りの中で次のように書いておられる。「私は、ヘーズレット主教が、戦後、リンカーンの私たちの家に訪ねてこられたときのことを覚えています。当時父は、リンカーンの神学校の校長をしており、多くの来客がありました。でも私は、ヘーズ

レット主教が来訪し滞在されたことを格別に記憶しています。なぜかといえば、師は、私の両親の在日時代の特に重要な方であり、父母はよくそのことを話していたからです。ですから私も同主教とお会いするのは特に楽しみだったのです」。

ヘーズレット主教は、戦争終結わずか二年後に天に召された。

本文中の英文の訳出にあたっては、北條鎮雄氏のご協力を得た。感謝の意を表したい。

一三・資料

資料(一) L・E・リー氏による、「アルバートホール集会」の様子

「大主教が座長の席に着かれました。何人かの方が話されましたが、皆さん、落ち着いて穏やかに話されました。お一人は、現地の状況を調査するために中国に行かれたリットン卿でした。彼は事実を知っていましたから、感情に訴える必要はありませんでした。もう一人はクリスチャンの中国人教育者でした。彼はキリスト教主義の立場から日本人の横暴について語りました。その他、何人かの人が話しましたが^{注⑥}、その一人はイギリス人の牧師でした。次は、ボナム・キャスター卿夫人の

番でした。彼女は他の人々よりも遅れて来ました。それまでは、集会は静かで、大主教も感情を抑えておられました。次いで、レイディー・ボナムが意見を述べられたのですが、彼女は、会衆が沸き立つきっかけを待っているのを読み取り、そのチャンスをつ掴んだのです。『皆さん、立ち上がって行動しましょう。さあ、皆さん』と、彼女は拳を振り上げて氣勢を上げるのでした。彼女は、きれいな人で、身なりも立派でしたし、滔々とこの集会の趣旨を述べるのでした。彼女は、割れるような大拍手をもって迎えられました。

聴衆のなかから一人の男が演壇のところまで走り出て来て、四人の警官に取り押さえられ、ホールから連れ出されていくといったハプニングもありました。

ラング大主教は冷静で、これ以上の示威行動はありませんでしたし、何の決議も行なわれませんでした。先ほどの拍手以外には何事も起こりませんでした。集会は終わりました。大主教と説教者が演題を立ち去ったあと、これを見ることの出来なかつた人々のために、再度、最初のフィルムが上映されました。^{註⑥}

資料(二) 『基督教週報』掲載のラング大主教宛抗議電報

に関する記事

「英国大監督浅慮の行動」

(前略) 日本聖公は支那の悪宣伝に乗せられた認識の不足よりせる判断に基づき、大監督ともあるうものが此くの如き集会を司ることの不条理、且つ国際的影響の大なるものなること、日本聖公会は日本の独立な国民教会であるが大監督の此る行動は日本聖公会及び一般の日本基督教会の将来に頗る大きな不利を齎すべきものなる事等から、日本聖公会は之をもって重大な問題なりとし、日本聖公会総裁の公けの名を以て大監督に強い言の抗議の電報を打った。(中略) 閣下願くは再考せよという意味のものであったという。(後略)

『基督教週報』第一七六号^{註⑦}

資料(三) アルバート・ホール集会に関するカンタベ

リー大主教からの返書

「昭和十二年十月三日アルバート・ホール反日大会に関するカンタベリー大監督よりの書翰

(本書翰は日本聖公会等の抗議的電報に対する日本聖公会監督ヘズレット宛の返書にして、本年(十三年)一月八日同会教務院に於て翻訳教会幹部のみに配布し一般に公表せざりしものなり。)

(前略) 自分は、日本人の愛国心、国民的感情が、ことのほか熾烈であることを能く知って居る。従って、自分の行為若しくは言論が、日本の教会がすでに受けつ

ある困惑と憂慮を増すことになるのならば之は実に遺憾千万である。

一、然し乍ら、中国における日本の陸海軍司令官が、此悲惨な戦争を如何に指揮していたかを、貴下及び信徒諸氏が、どの程度に、知って居らるゝかを疑はざるを得ないのである。何となれば予は日本で行はれた甚だ嚴重な新聞紙の検閲があり、また国家的宣伝の活動に就いても能く知っているからである。
(中略)

二、(中略) 英国各教団の代表者は、一樣に日本国民の考慮を求めるとに同意したが、前述のようにこれは何らの敵意から出たものでない。当時我らが事実として知り得たる処に基けば、それは基督教の主義にも人道の主義にも一樣に影響を及ぼすことと見へたから、私は沈黙を守ることが出来なかつた。

三、(中略) 目下予は、本月二十九日、ウエストミンスタアペーに於て行ふ日本聖公会五十年記念礼拝と中華聖公会二十五年記念礼拝の為に準備中である。予は此事に依て之ら二教会と英国聖公会との間の結びが強化せられんことを信ずるものである。

千九百三十七年十月二十七日

閣下の最も誠実なる コズモ・カンター」^{注④}

資料(四) 日本聖公会総会における決議案

決議第六号 時局に対する決議案

「日本聖公会第一九総会ハ 今次支那事変勃発以来 皇軍ノ不撓不屈 盡忠報國ノ至誠ニ対シ深く景仰感銘シ我等国民精神總動員ノ主旨ヲ体シ 堅忍持久 各々其ノ地位ニ於テ奉公ノ誠ヲ効シ上 皇運ヲ扶翼シ奉リ 我ガ公會本来ノ使命タル 傳道報國ニ邁進センコトヲ期ス(以下略)」(引用者注^①引用にあたり、語句間に隙間を挿入した)^{注⑤}

注① 引用者による注^②この集会での発言者は、ラング主教のほか、Prof. Chang Peng-Chun, Rt. Hon. Earl of Lytton, Rev. Sidney Berry, Lady Violet Bonham-Carter, Rt. Hon. Herbert Morrison の諸氏であつた。このうち、リットン卿は、国際連盟による、満州国での現地調査の結果を「リットン報告書」としてまとめたことで知られる。

注② レオノラ・エデイス・リー「戦中覚え書」『松蔭女子学院史料』第8集 二〇―二二頁 松蔭女子学院 2008

注③ 小林正男編『史料が語る戦時下の日本聖公会(二)「日中戦争と公会信仰の試練(昭和二年―六年)」七頁より再引用

注④ 同志社大学人文科学研究所、キリスト教社会問題研究会共編『戦時下のキリスト教運動…特高資料による昭和11年―19年』第

1 昭和11年―15年 八六頁から再引用

注⑤ 小林正男編『史料が語る戦時下の日本聖公会(二)』六頁

一四 引用・参考文献

1. ION, Andrew Hamish: *The Cross and the Rising Sun*, Volume 2 *The British Protestant Missionary Movement in Japan, Korea and Taiwan, 1865-1945* WILFRID LAURIE UNIVERSITY PRESS 1993
2. ION, Andrew Hamish: *For the Triumph of the Cross: A Survey of the British Missionary Movement in Japan, 1869-1945: The History of Anglo-Japanese Relation, 1600-2000* Volume V: *Social and Cultural Perspectives* Palgrave Macmillan, 2002 に所収
3. A・H・アイオン著 光永雅明訳「十字架の勝利のために 英国による対日布教活動の概観(一八六九～一九四五年)」都築忠七・G・ダニエルズ、草光敏雄編『日英交流史 1600-2000 5 社会・文化』東京 大学出版会 二〇〇一年 に所収
4. ION, Andrew Hamish: *SAMUEL HEASLETT, 1875-1947: Missionary and Bishop* Edited by Hugh Cortazzi Japan Society 発行 "Britain and Japan: Biographical Portraits" series Volume V Brill Publishing Co., 2004
5. 塚田理『日本聖公会の形成と課題』(聖公会出版 昭和五三年)
6. 塚田理『天皇制下のキリスト教 日本聖公会の戦いと苦難』(新教出版社 一九八一)
7. 塚田理『初期日本聖公会の形成と今井寿道』(聖公会出版 一九九二)
8. 塚田理『イングランドの宗教 アングリカニズムの歴史とその特質』(教文館二〇〇六)
9. 同志社大学人文科学研究所、キリスト教社会問題研究会編『戦時下のキリスト教運動：特高資料による昭和11年―19年』新教出版社 一九七二
10. 小林正男編『史料が語る戦時下の日本聖公会(二) 日中戦争と公会信仰の試練(昭和十二年～一六年)』
11. レオノラ・エディス・リー「戦中覚え書」『松蔭女子学院史料』第8集 松蔭女子学院 2008年
12. 日本聖公会歴史編纂委員会編『あかしびとたち』日本聖公会出版事業部 昭和四九年
13. 日本聖公会歴史編纂委員会編 松平惟太郎著『日本聖公会百年史』日本聖公会教務院文書局 昭和三四四年
14. 立教学院史資料センター編『立教大学の歴史』立教大学 2007年
15. 浦地洪一『日本聖公会宣教150年の軌跡』日本

- 聖公会管区事務所 2012年
16. 日本聖公会横浜教区歴史編纂委員『み名によりて
——横浜教区125年の歩み——』聖公会出版 1
998年
17. 松平惟太郎「聖公会神学院史」『神学の声』第三卷
第一号 聖公会神学院 昭和三十一年（聖公会神学院史
編纂委員会『聖公会神学院100年記念誌』 聖公会
神学院 二〇一一年に転載。なお同誌十頁には、大正
六年の夏季修養会のおりの出席者の写真が掲載されて
おり、そこには、ケリー（英）、スパックマン（米）、
ヘーズレット（英・CMS）各教授が並んで写ってい
る。）
18. 『英国人宣教師 ライオネル チャモレー師の日記』
①（日本聖公会文書保管委員会編集、日本聖公会管区
事務所発行、聖公会出版販売 二〇一五年）